寄り枝

三拾二

32

梅枝十八 卅二 以詞為巻名

巴抄云梅カ枝ハ催馬楽ウタヘル詞也源氏三十九正二月ノヿタルヘシトニヽ花鳥モ同但三月迄ノヿト成ヘシ末ノ詞ニ花盛ハ過テ浅ミトリ心空ナリ夜ノウタハノ巻ニモ三月ヨリ書出シタル也然故花鳥巴抄ニハ正二月ノヿト云ル可成

△御モキノヿ 明石姫ノモキノヿ源ノ思召イソクナリ今年十二也ウツホ物語ニ云夜原ノ君ノ娘アテ宮十二歳二月着裳ノヨシ見ヘタリ此例ヲ引テ書ナリ

△春宮モ同キサラギ 後ニ今上ト申ナリ朱雀院ノ王子也今年十三也是ハ冷泉院ノ例ヲウツセリ冷泉春宮ノトキ應和三年二月廿八日ニ元服也但諸抄ニハ十三ト云ヘトモ十四可成源須磨ヨリ帰京ノトキ二歳ト見タリ夫ヨリ年数十四ニ当ル也

△ヤカテ御参リ 明石ノ姫ノ入内モ打續可有ニヤト也

△正月ノ晦日 ツゴモリトヨム也節會モ過テ隙アル日ナレバトナリ

△大二ノ奉ル 須磨巻ニ云ニテハ不可有何也ニテモ大二ノ乄五ケ年ブリニテカハルヿ也大二ヨリ唐物進上ハ例年ノヿニヤ香ナドモ近キ年ノヨリハ昔ノ香ニサルベキト源ノ思召ニ二条院ノ御蔵ノ香モ取出シクラベ給也其次ニテ唐キヌニシキアヤナドモ取出サセ給ト也

△近キ代ノシツラヒ 裳着ノ用意ノヿ也

△オホヒ 蓋 霞 打ミダリノ錦ナド外ハラデン内ハ必錦ヲ用ナ也

△御もぎの事おぼしいそぐ御心おきて世のつね
ならず春宮もおなじ二月に御かうぶりの事
あるべければやがて御まゐりもうちつゞくべきにや正月の
つごもりなればおほやけわたくしのどやかなるころ
ほひに薫物あはせ給ふ大貳のたてまつれる香ども御らん
ずるになほいにしへのにはおとりてやあらむとおぼして
二条院の御くらあけさせ給ひてからの
ものどもとりわたさせ給ひて御らんじくらぶるに
にしきあやなどもなほふるきものこそなつかしう
こまやかにはありけれとてちかき御しつらひの
ものゝおほひしきものしとねなどのはしどもに故院の

讀杜艸堂

アヤ 綾錦ノ 緋金錦ノ 金ヲシリ付タル錦ノキンニ ランノ私カ一説赤衣 冬緋衣トニ云リ

沈香ハ昔今取ニゼ 仕トノ

ニツケ タキ物ニ種 ヅヽ合タニヘトノ

イトナニノ帥宮ニ取原 テミヲカミニタキ物合仕 香モエラミトンヘ仕不役取 トノ

物ヤウス 織臼 タキ物ヲ調合 スル寸ノ用具ノ

ソシワウノ几イニシメノ 一ツノ方 何云古ホニ 大略ソシ王トアリスュル不得其意 モシソウワウヲ辰轉昏字ノアヤ一リカ ソカギクラモ 兼和菊ト云説有カ ヒ物注ニモ大乗ヲ大ゾウ トキリ 思茶花ソウワウノ几イニシメノトデキノトニ 此香ノ合ル氏妾住セリネヘ丁ナレバネキノ

清世のりしめはりこゝとのたてまほさまさ〳〵は

あやひゞんきせなどこれ世乃花よ似ずおはしまく

御らんしあそばさるゝ世絵てきのたびのおや

うた絵などは人々ゆ絵そうじどもえ着とれとわ（大ニノ紅上ニタルカ）

なるべきうを絵てかうくゝゆくわきまるせ絵ふさ

くきはゝはれきさうを人ゆきすへと紫のこときさきたまへつるく（人思ヘタナ）

をくわ物よ上達部の絵くふどゝ世よなれを歯よ内ふも（内沈）

靴にもいせなく絵ふようへてあさくふえわとく

のへてうかうれみ書みてうしあましきこ絵なわ

おどはきん麦よはなまおりしてうむわうれ

清いまめみふうれはうどゆうでゆはゆへてまは

ウヘハヒニガシノハナナイデ ウヘハトハ紫ノ上ノ巴云花ノ説一ニハ不注 寝殿トニ云テ 母屋ノ内ヲ半分シワケテ中ヲヘダテ、ハ殿ナ人ヨヨビ入ル所ヲ云ノ 几帳ニ障子 立ツヘダルヲ中イトニ云ヘル トヽヽ

カタミニイドミ 挑 源ト紫トアラソヒ合タミヘルノ

ヒシタニヘバ 秘仕ノ 香ヲリノ善悪ヲ定ニ ト源ノ仰バノ

人ノ几オヤゲ双地ノ 紫ヲバ源ノ親ニテ生 立仕乃オヤゲナキル争ムト云ノ

何方ニモ 源ニモ紫ニモ ヨソ秘ニタニヘル几前ニ 人〻数多ハイタニハサルトノ

カウゴノ皆 母屋ノ カザリノ洞庭ハ東雲ノ 厨子ナニ皆ハ合ス其中ニ三合ハ香盒ノハコノ東ノ厨子ノ上ニヲクノ一合ハ裏盒トニノ白キ色ノシハノヨリタル茶ノカリタル 盒ノラキ物ニ必アルヿノ 裏盒其ハ梅花ホノ犢ヽノタキ物ヲ入仕ヘルナリ 雲母ノ盒其中ニアリトニヽ ヒトリ心バヘ カウロノ 「ノ方目ナ」サルテイ「 ニ令テメカシウ仕タイヲ アメラシノシナシタニハ ルトナリ

はゝんたまのひりんゝふきめて給やたまふ（箕ノ上）んハひのん

よしのなるれをふちいそでにはきはらひことあり

ふかうきれはをまゐふてハ東乃武家れは御ほうを

はらえてうるみゆゐどみあそを絵ふかどしかなじう

ひし妙へぞふかるひれふあきおはくゝ勝負（かちまけ）のさきめ

あはべし覧おもとの絵ふ人れはおやけなきはかう

うひきう絵なかいほうさゆもおまへよさみつぬ人

あまうへは御でうせ゛もしうこうろ乃さまうを

ほくし絵へふ中をもうきのはなこどものやう

はおのすかるひとわ乃こう絵りんもめくされぬはま

いまのめあしうやうかんへさ紡たまへぷありはこの

前斎院トハ槿ノ斎院ヨリ源ノ方ヘ返文来リタルトゝ
チリスギタル　考光日記云　比丘ノ山ニ住侍リケルニ人ノタキモノコヒテ侍リケルニ梅ノ花ワヅカニチリ残テケル枝ニ付テ遣シケル
指遣　是ヨリテチリ過ニケル梅ノ花色バカリゾ枝ニノコレル
宮ナドロテトハ源ノ兼テ斎院ヘ好色ノイ
サノ方ヨリ男ヘ文ヲヤルハスゝムト云ゝ
イトナレゝシトハ斎ヘタキモノ合テタマヘト云遣シタルニヨリテノ返文ナレバ

あまたおほくし給へらん匂ひどものすぐれたらん
どもをかぎあはせて入むとおぼさる二月の
十日雨すこしふりておまへちかき紅梅さかりに
色もかもにるものなきほどに兵部卿宮わたり給へり
いそぎのけふあすになりにけるをとぶらひきこえ
たまふむかしよりとりわきたる御中なれば隔なく
そのことかのこときこえあはせて花をめで
つゝおはするほどに前斎院よりとてちりすぎたる
梅の枝につけたる御文もてまいれり宮きこしめす
こともあればいかなる御せうそこのすゝみまいれるにか
とてをかしとおぼしたればほゝゑみていと

沈箱　瑠璃ノツギ器也
茶ツギナドニ云ト同ジカゝ
タキ物入タル器也
心バ　箱ノカザリ也　心葉
松モ梅モ折枝ノヤウニ
カ子ニテ彫タルモノ也
コニルリノニハ五葉ノ
枝黒方ニヱニアル
多ゝ松ニ付タリ松ハ
寒ニ堪タル木也黒方
モ冬中霜雪ニシカ
サレヌ匂ヒニタトヘタリ
引ムスビタル　箱ノカ
ザリノ糸ヲムスビタ
ルテイ也

なれ〳〵しきことをきこえつけたりしをまめやかに
いそぎものし給へるなめりとて御文はひき
かくし給ひつちんの箱にるりのつきふたつすへて
おほきにまろがしつゝ入給へり心葉こんるりには
五葉の枝白きには梅をえりておなじく
ひきむすびたるいとのさまもなよびやかになまめ
かしうぞし給へるえんなるものゝさまかなとて宮御
めとゞめ給へるに

花のかはちりにし枝にとまらねどうつらん
袖にあさくしまめやほのかなるを御らんじ
つけて宮はことことしうずじ給ふ宰相の中将御使

今ハ斎院ニテモナキト
云心ヲチリスギタル枝トヨメリ
タキモノハカモユナメ
ニハナリタル枝ナレバト
ニヲスト早下ノ詞也
ウツラン袖トハ源君ヲ
サシテ源ノ袖ニハフカク
シミヤト也
ホノカナルトハ斎ノ手ノ
ホノカニスヘルヲ蛍ノ
見ツケ覚シテコトく也
ズジ給トゝ

紅梅ガサネ 紅梅ノ
カラノヨリヤノ細長シ
女ノソウゾクト裳
カラ衣二枚ガ今
使ニ給ルし

こずゑどもめさましていとゞうるはし紅梅のこうちぎい

かさねのかゝれほどなかさんとする女のさうぞくか

ソノ色ノ紙 紅梅ガサネノウスヤウカ

ばかり御使にもとらせまかまりておまへのまなふ

たゞきそえてつかはさせ給ふ宮のこと思ひやらるゝは

宮詞 文ノ時

女りけれはすのもとくに給へめのかみのかゝくてくし

給ひうつろひそいとゆかしきおかしげなる御事とは

侍らむとくあくしおかしげなるうつくしけまさ

凡観ノイデニ 両義アリ 源ノ父手ヌニヘル次テニ女院ヘノ文ヤヲ仕タルト宮ヘ手テ見セ給ヘルトキハトヤアリツラシモ手ヨリウバギテ源ノ詞也 一義ハトヤ有ツラシヲ双地女ヘノ文ノ次テニ

如此好色シニゼテノ文ヲナシタニヒウラフトモ源ノ仏ヨシテアトヤ有ツラシハ手ハ此カト見タルトノ仏し 花ノ丘ニ源ノ今ハケタキモノハカスグレタルトし 随分人ノトガメザルヤウニトツヽ 二三

ズレモスグレタハ雑色ト

ホメタルヲ但好色ヲ下

ンニテハタキモノハカニテ弥欲ヘン心ヲトヾムル也 人ノ日ヲハ随分ツヽメモトムルニヤ 何ニ引 後セニ 梅花カラ吹カクル春風ニ心ヲトメバ人ヤトガメン

とて給ひありて

りけれはいとゞこゝ給をきこしめすかゝる人それゆへ

ニメヤカニハスキ〳〵モハ
根イーシカれ二実〳〵
若タテハスルハスキ〳〵モ
此十ヒモ又トナキ一人姫
十ヒバ是コソ実ニ子ナシバ
何れニイトナニテモむ
ト世ノ人ゝモ思ハントし

めんの給はせめでとやかはほしむすめやうなはは

御祝ぐしさまうおまえとえもなのめならぬ人のうへ

まそこえいとゞあはれのいとゞあかずめでたしと思ふ

ウトキ人 外人ゝ
白氏 外人不見見ヘ
応笑
他人ヘハイカドト思テ
中宮ニモキノコシ給
シト思トし

外人あしてなんいとみくるしきまでうとき人はゆるさ

れいたゞ御中宮まうでさせ給ひて思ふ給へ小宰

妃ノ宮ゝ才能上手下し

志ゞしきほどみなまじゆえあまへどそばのしき所の

中宮ノイ源ト

ふうりおはすらんやなきは何事もすればほまれ

上衆 アヤカリ物トユんこ
秋好中宮ハ死トし

みをすぐむかしこゝゑげなくてなんなど言へる給へ

ものもなく世のおかしう浅くいふ事ともなわらわとこと

りわか給ふのはいそくりけりさく此あまた世給ふ

タキ物ハニメリニ白ヒ
ニストし

をのく侍はひして此の善悪のこゝろわかり給ふ

ワカセ 宮ヘノ詞し
タキモノヽ善悪ワキ
ニヘタニヘトナリ
君ナラデタレニカ見セン—

うんかゝやうゐ給へまはばまくかしうこゝろあらで

ままたきのんまゐれわの世給へ大事のみきんかゝる

源詞 スヽミヲクレタルガ一シユヅヽ善悪ナカラニワキタメニト

ゆるし給て御ひとりともめして心みさせ給ふしる人にも

前ハ源ノ詞ニテ 蛍詞

すやとひけし給へといひしらぬにほひともの

をくれたるか一くさなとかいさゝかのとかをわ

源詞

きてあなかちにをとりまさりのけちめをおき給ふ

カノワガトハ源ノ合給二種ノタキモノヲ今取出シシメシ給ヘシ 右近陣ハ内裏ノ内ニ有ナリ 承和ノ比時右近ノ陣ノ御溝水ノホトリニ梅花香ヲバ梅ノ下 菊花ヲバ菊ノ下 黒方ハ松ノ本ニウヅミ 水ハイケミヅヲ地ニウヅニル其ヨリ杵侍テ其ホドヲ不過タキモノヲ埋ル 其氏ハ四季ニヨリテ埋ム日限アリ 河花ニ香其氏滴水ノホトリニ准テ六条院ノ西ノ渡殿ノ下ヨリ流出ル水ギハニ源ノ合給タキモノヲ埋置給ルシトシ

かのわか御ふたくさのは今そとうてさせ給ふ右近の

ちんのみかはの辺になすらへて西のわた殿

の下よりいつるみきはちかううつませ給へるを

宰相ニ惟光ヲ任スル事 実ニ始テ爰ニ見ユ 光ノ子ノ兵衛ノセウハ乙女ノ巻ニ 妹ノ方ヘ文キリノ使シタル人ナリ

惟光の宰相の子の兵衛尉ほりてまいれり宰相中将

とりてまいり給ふ宮いとくるしき判者にも

ケムタシハ ムツカシト云 タキモノヽケフリニヨセテアル詞ナリ 同シハウ ミナモトハ 何モ同方ナレ氏香ニ浅 源心〳〵ニ〳〵トシ

あたりて侍るかないとけふたしやとなやみ給ふおなしかう

こそはいつくにもちりつゝひろこるへかめるを人

カギ合 俗ニキクト云 今ハ蛍ノカギアハセヒハンナリ

ひとの心〳〵にあはせ給へるふかさあさゝをかきあはせ

給へるにいとけうあることおほかりさらにいつれ

サイヘド 両説アリ 源氏ノタキモノスグレタルトハイヘド 斎院ノモ心ニクキトコロアルトシ 又斎院ノ方ニ花ノ方ハナリニシ 梅花ハ早下シタリ 源モ黒方ヲ合給ト見エタリ 斎院ノ黒方モスグレタルトイワンタメニ源ヲバ侍従ト云

ともなき中に斎院の御くろほうさいへとも心にくゝ

しつやかなるにほひことなりしゝうはおとゝのは

すぐれてなまめかしうなつかしき香也とさだめ給

タイノ上 紫上也 三種合給ヘル中ニ梅花香スグレタルト也 春ヲ好給ヘルニシテ時ニアヒタル香ナレバ梅花ヲスグレタルト定給ヘル也 花鳥ニ云 タイノ上ノタキモノハ八条式部卿ノ方ノ侍従 黒方ノ外ニ梅花ヲ合給ヘル 彼ニノ方不伝ト云ヘバ紫ノ上ノ合給ヘルノホカ 寛敏僧都カ説ニカ セテ春ナレバ丁子ヲ サレタルニヤ 梅花ハ時ヲ得タル上春ヲ愛シ給ル方ナレバニツノホヒラセキテ其アワレ式ハ梅花ヲ猶スグレタルト判シタル也

對のうへのはみくさある中に梅花はなやかに

ハナヤカナルテイ也

いまめかしうすこしはやき心しらひをそへて

めつらしきかをりくはゝれり

コノコロノ風ニ 時分相当ナレバ也 古今 花ノ香ヲ風ノ便ニタグヘテゾ鶯サソフシルベニハヤル

このころの風に

たくへんにはさらにこれにまさる匂ひあらしと

夏ノ御方 花チル里也 人々ノイドミ給フニ合タルニヘルニトカ扨ノ一ニモ不給也 花チル里ハ性ナレバ荷葉ヲ一種給ヘル カヤウトハ夏ノ御方ナレバ也 四季ノ方 春ハ梅花 夏ハ荷葉 秋ハ菊花又侍従 冬ハ荷葉又黒方 寛敏僧都ノ説云 春ハ丁子 夏 秋ハ沈香 冬ハ薫陸 如此香ニ随テ三銖ヲ可加ト云

めて給ふ夏の御かたには人〳〵のかう心〳〵にいと

み給なる中にかす〳〵にもたちいてすやと

冬ノ御方 アカシ上也
四季ノ御方ハ何モ合可
在ヲ其中ニ冬ヲトリ給
シハアイナカラント思召
テノ薫衣香ヲ合リノ
ごへし

煙をさへ思ひきえ給へる御心にてたゞ荷葉を
一くさ合せ給へりさまかはりしめやかなる香して
哀になつかし冬の御方にも時々によれるにほひの
さだまれるにけたれんもあいなしとおぼして

前ノ朱雀院トハ承平
ヲ云リ後朱雀院
ヨリ前ナト云ル
ノ朱雀院ヨリ前ナト云カ長暦ノ御門ヲ後朱雀院ト云リ
宇多帝ノ一ノ宮ニ云ハ承平ノ御門ヲサシテ
公忠朝臣ハ光孝ノ御孫
承平ノ比ノ人也大和ノ
国紀ノ子トニ薫物合ノ役ヲ兼ルニヤ
百歩ノ香トハ百歩ニ及
テ匂名也薫衣香
ノ一也公忠朝臣ノ方也

くのえかうのほうのすぐれたるはさきの朱雀院のを
うつさせ給て公忠朝臣のことにえらひつかうまつれ
りし百歩の方など思ひえて世にゝずなまめかし
さをとりあつめたる心おきてすぐれたりといづれ
をもむとくならずさだめ給を心ぎたなき判者
なめりと聞え給月さし出ぬれは大みきなど
参りて昔物語などし給かすめる月のかげ心

前ニ雨ノシメリニ蛍ヲ入ミ
タルトアルニヨリテ雨ノ
ハレテ月出タルニモ雨ノ
名残ト書し

にくきを雨乃なごりの風すこし吹て花の香なつ
かしきにおとゞのあたりいひしらずにほひみちて

蔵人所ハ殿上ニアリ
御遊ノ関白ハ蔵人ヲ
召ス源氏ノ方
ニモ一スへし
内ノ御ハ花モギノ入ルニ
ケンへし
コトハ和名箏ノ琴
計ニモ不限し
装束トハ絃ヲ張
掛計ニカハ付ナドスル也

人の御心ちいとえんなり蔵人所のかたにもあすの
御あそびのうちならしに御ことゞものさうぞく
などして殿上人などあまた参りておかしき笛の音ども
きこゆ内のおほいとのゝ頭中将弁少将なども見参
ばかりにてまかづるをとゞめさせ給て御ことゞも

オトドニサウノ 源ハイツモ
和琴ヲ引タニハ氏付度ハ
箏ヘ又中ハ父門ヨリ
ワゴン上手ナリ柏ヘユウギリ給し
弁少将柏ノ弟声ヨキ人

めす宮の御まへにびはおとゞにさうのこと
参て頭中将和琴たまはりてはなやかにかき
たてたるいとおもしろく聞ゆ宰相中将よこ笛
ふき給ふおりにあひたる調子雲井とをるばかり

梅か枝　催馬楽ノ名　サイバラニアリ
梅カエニキヰル鶯春カケテナケテハレ春カケテナケドモイマダ雪ハフリツヽ三段アリ足下ヨシヤ雪ハフリツヽ
弁ハ時ノ仕人ナリ
桃ノ春ニテ高砂ウタヒタル人也

源ノ盃取給ニトㇾ
鶯ノ声トハ兵部卿ノ一心ニシメツルトハ姫君ヤ也

古今　素性
イツデカハニコヽロノアルモ花ニナラズバ千世モヘヌベシ

於ちて
花ノタメニカヘランカヅラノ鶯ノネグラノ竹ニ手ナフレソモ

少将そたか弁かる拍子とりて梅かえいたしたる
程いとおかしうわらはにて韻ふたきのおりたかさ
ごうたひし君なり宮もおとゞもさしいらへしたまひて
こと〳〵しからぬ物からおかしき夜の御あそび
なりかはらけまいるに宮

（蛍）
鶯の声にやいとゞあくがれん心しめつる
花のあたりに千代もへぬべしときこえ給へば

（源）
色も香もうつるばかりにこの春は花さくやどを
かれずもあらなん頭中将にたまへばとりて
宰相中将にさし

（柏）
鶯のねぐらの枝もなびくまでなを吹とをせ

柏ノ宰相ノ中将ヘ
心アリテ風ハ心ノアリテ梅ノアタリヲヨギテ不吹ヲ
云情ハ吹ヨルヘキカトシ笛ニハ落梅ト云曲有也ノ

鳥ノホコロビトハ鳥ニ心ヨソチソシ月ト花ヲ霞ノヘダテズハ鳥モ鳴ヌトゾ少メ笛ヲホメ給ノ
コトニ明方ニ前ノ夜ハ夜ノ内ニヨミタニヘル明方ノ此ニヨミテ三ル真実ニ明方ニ成テ兵部帰給トシ面白キ也

手フレタニハヌハ未焼ナリ

エナラヌハタヾナラヌ
源ノ装束ノウツリガノ外ナラヌヲ外ノ思人ナドノ香ヲリカト妻ノトガメントシ

よはの笛竹宰相中将

（夕）
心ありて風のよくめる花の木にとりあへぬ
まで吹やよるべきなさけなくと皆うちわらひ給ふ
辨少將

（弁）
霞だに月と花とをへだてずはねぐらの鳥も
ほころびなまし誠にあけがたになりてぞかへり
給ふ御をくり物にみづからの御れうの御なをしの
御よそひ一くだりてふれ給はぬ焼物ふたつほそへて
車にたてまつらせ給ふ宮

（蛍）
花の香をえならぬ袖にうつしもてことあやまりと
いもやとがめんとあればいといたうくしたりやと

此車カクルホド 両説アリ六条院ノ門ニテノ事今牛ニ車ヲカケル所ヘシヒツケテ源ヨリヲセシナリ
又蛍ノ殿ノ車宿リニ添イ付テトアリ

メウラシト 源ノ方朱買臣ノ古事ニテヨメルニ叙メウラシキトアリ兵アニ夜ヲヨカレラモ妻ハ朱買臣カ錦ヲキテ故へカヘリタルヤウニ珍ク思ハントアリ説抄ニ源ト兵アトハヘダテナキ中ナレバ叙ヲリタル装束ヲサシテ花ノミシキト
奈香タルト云リ 此哥ニ付テ源氏一部中ニ香ヲハ源ニハナキトアリ
又キリ 此内ニテアラハヘ蛍ノ心方兵ノタテヘノ夜カヲラモ又ナキヿニシホサントアリ

ヤラガリハ メイワクアリ

わらひ給は車あらそひなとりをのて
めぼしとおぼしたるも給はらん月のみつこさを
あそびの御遊なき事とおぼさはらん也おまはば
いとゞいとうかゝりわたらせ給ふばかりくの君たちゆかしと
さとしうらぬ事まうなかごうちきなどの御
け給ふかくて斎宮のおりゐ給ひぬの時よりわ給
宮のおりし後はこゝしのまふらいでさぶらひの御
ぐ御たちのみかしなどもやうやうてこゝさにまいまわ
うんもこの御いさよ中宮よ御對面あり御はかさく
乃世尽しおほきたる程ゝすみえさわ子乃時に
御もさ御おぼとなぶらかのゝなまさば御けりひ

明モキノ御エヒニ中宮ノ行啓ノ了後世ノ例ニモトナシ
ヒノモキラコナ
ノダニヒケリハ中宮ノ羽ジクコスムケスん

いとめでたしと世宮にみえまさたまふそゝ給か
いつまでも御とた乃ゝまで心げなきすかことすみ
御覧ぜられ遣はるなり乃ちの世にためしな御座と
おぼ給世がくおもひの思ひは給ふかなど世し給ひ乃
ひまうすとも思ふあまへいま給ゝすわ給の御はうかり
おもくおもひわたるを給ひなむ中ゝ心をうまぬ
べくかゝ給ひけつほどみ御しきりひにゐよく
わかの行ゆあふゝおもとをむぼすはまにおはしま
侍きりひとゝもさしつどひ給ひへぶをわりめで
なくおもふかゝ母宮のうしふおもきでゝええまふうぬに
いとゞ思ひましまふんぐあしうるそまうのおつせや

東宮十四二月元服ノ
例前ニ注ス

左ノオトヾ 梅ヤ坊ノ左
府ト計アルユヘテタレトモ
不知左大臣ハ此巻ニテ
テタレ氏ナシ

せましとおぼさるゝ人のおもひをはゞかりてえそゝのかし給はず
かうぶりの儀式いみじきにおぼしいらるゝことおほく
うちさき〴〵のことしりおぼすは例にこえどけなくまで
りんも申しゝやうにてこまかうふうしろ宮の御
元服は廿日のほどになんきたるにとおとゞおほし
おりしまいらせたる人々むすめどもゝほのまいりつべき
るをとんざしおほかれなきかぐる此殿のおほかりきちまと
はまれいとちとなきは申しませやまうらりんと
左のおとゞ左大臣などもおぼしとくまゐるなかなる
きこしめしていとたいくしきうなわ宮付の
すちえはまるはゝ申ありましのかた御あなれど

前ニ云梅ヤ立ノ左フノ
三ノ君入内有テレイケイ
殿ト云後ニ宗木ノ
巻ニ麦垂ト云ハラ
二人テ上ノ女二ノ宮生
給ヘリ

まんこうかいなうめすこゝのきやうざくひあまる達
ひまなくこめられなだまかりんあらじとのまゐりひて侍
際ものびぬはゞかりいみじきめ給くはとおぼし侍
まいとゞ給くにきて給て左大臣殿乃三のきみと宗
給ぬ源宰相殿ゞ祭にゆきたる御さいせうしの御
とのは一所またけいき給ありためまゐらひて侍宗わ
のひめるを春宮や小もんりとなかうき筋へは四月
にまうさこめさ務給侍てうとせもえとはるよわも
とりのへて侍にはまうも物乃まてさりしこゝらなど
なも御覧じいまはすくまゐるみちく乃
よまどもめしあはめそこまのありみえのきさとも此へ

カナノミナン　カナサハ
昔ノヨリモ今ノ世ハ多
除能ノ多ルトシイロハ
作者ハイロハニホヘトチ
リヌルヲ迄ハ大安寺
護命僧正ノ作ヘワ
カヨタレソヨリ已モ
セズ迄ハ弘法大師ノ
作ト云京ノ字ハ傳教
作誤ナト云リ往古ノ
和語ハ万葉ヲ日本紀
ノ仮ニ手シ
トヨリ　外字一シ
迎キヘカ奥ヲオウヨ
リト云リアル説ニ手跡
トニ云トミニ但取ヲ
テカ
女デヲ　原ナラモタ
ニラヘウホヤ流ニ
ダル其ハ手テダエヲ
レタルカヨソ男手モ
女手モナラヒ給メレ
トミヽ

き世んさうしのたこどもあいふべきさうしたし
昼って（草術し）おひもたまふべきをえらせんいましへの
すみあぶきたの御し（八手なニモ）ま此世よな我乃うし然へ事
たくひのもいとおほくさうらへばそれ乃こゝろ（原ヲ紫ヘ）皆
もはなとあぶ成りあさく成り世の中なきゆへ
うんなりに（口ちん）お世はいときたはなくなりわたるふる詩（万葉ノ十）
ほとうさまれふやうもはほ（仕）とひろさんゆうか
なうひ一すちふみよひてなんわりる（一妙）（イ呂ハ）くふあう
しきつきとまはてこうりきいにひとくそ
はまと女て我とうはよいきをなしひしはうわよ
こともなおあおおかくつどへたなしなりよ（和ね）中宮の

（六条ノ）御息所のこ給すもいまたはうしつまかい然へ
まし一くさまり（イジ）わわざとなるぬ我えそきたいことに
おもくしりやさそはるまじ我たな我だそきさえ
しずりしなやしき9小思ひき（フイ）（円机二）えん給へましど
生（原ハウトクハセ子ヒトい）もわうぶわふわんや（中宮へ）ふ為くうし給こはうう
まはあ事をこゝ（息ハ）給ふかうおもやしうになさき御
うまにもえぶ御しなうんかやの御てハこ返かよ
あしけなさゆうかどやをくれたるんとまちけぐ
めきそ我えん然ふ我入る乃まひ持てはいとくしな
ふかう御めきあるはちハあわしうかどよりあに
ありてよほひそすくなりまし院（朧月）の因持乃のかんこう

こそ世の上手におはすれどあまりそぼれてくせぞう
ひためるさはありともかの君と前斎院とこゝにと
こそはかきたまはめとゆるしきこえ給へばこのかずには
まばゆくやときこえ給へばいたうなすぐ
し給ひそにこやかなるかたのなつかしさはことなるものを
まんなのすゝみたるほどにかなはしどけなき
もじこそまじるめれとてまだかゝぬさうし
どもつくりくはへてへうしひもなどいみじうせさせ給ふ
兵部卿の宮左衛門督などにものせんみづからひと
よそひはかくべしけしきばみいますかり
ともえかきならべじやとわれぼめをし給ふ墨筆ならびなく

三十 細云河花従 アヤニリ〳〵名ニ入テ手人ハカナニムシテ上シテスルテ筆多モノ〳〵トこゝ河ノ今案ニ云二十八文字ノ姿 定ルヤウ〳〵カナアシノ手ナセバシドケナキ文字姿アリトこゝ 二ダカヘヌサウシ(ヘウシ) ヒモ双紙ハ巻モ物ス 巻物ラモ双紙トモ云ハ又巻物モ双紙ト云二色ノ一ニモヤ何海双紙ノヒモハ フミニト有箱ニ入テノ紐ノヒモノ一カト云リ夫近モ十キ一カ

左衛門督 河巴ニ何人 ゾトウダカヘリ但引入ノ左ハ今ノ手内フノ下シヤクノ私カ

ヒトヨロヒ 一双 草紙二帖ノ一〳〵 係モ一双ハ二ヲトこゝ ケシキバミイマスカリ 兵部卿宮などハ ノケシキバミニテ 我ホドハエ書ク一トシト源ノ自ニシ〳〵

えり出て例のところ〳〵にたゞならぬ御せうそこ
あれば人々かたきことにおぼしてかへさひ申給ふもあれば(源ノ文)こまのかみのうすやう
だちたるがせめてなまめかしきをこのものこのみ
するわかき人々こゝろみんとて宰相中将式部卿の
宮の兵衛督内の大殿の頭中将などにあしで
うたゑを思ひ〳〵にかけとのたまへばみな心〳〵に
いどむべかめり例のしん殿にはなれおはしまして
かき給ふ花ざかりすぎてあさみどりなるそらうら〳〵なる
なるにふるきことどもなど思ひすまして御
心のゆくかぎりさうのもたゞのも女でもいみじうか
きつくし給ふ御まへに人しげからず女房二三人

レイノハ 前ノタキ物合ノ人ゝヘ草紙ヲ 礼紙シ

ニニ 高麗し

セメテトハ 紙ノコニカニツヤノヨキ紙ト云ナし

宰相中将 タキリし 式部卿宮ノ兵衛督ハ 真木柱ノ母ノ兄し 内ノ大殿ノ頭中将ハ柏木し 草手歌絵トヲトこゝ 巴ニ云中峰和尚ノ... 文字ヲ書ケリ草紙ノ表紙ナドニアルヲ 又ミシトこゝデイナドニテ草紙ニエヲ書テ一ニ文字ニテ書エ可成

花ザカリ 巴云 卯月天気和清ノ... イカガ四月ニアラズ三月ノ末ノ一し 源ノ古キモ思出テ心ヲ スマシテ 御心ノ行カギリ サウモカナモ女手ノ紙ニ書トし

前ニタキ物合セ給所

撥 簾一枚二枚ノ
コトヽ万葉ニ撥簾
枚ノ类トアル此良ノ
コトヽ

りけすゝなとまうせ給てゆへあはれなる寄集のうちに
などいひあへるやなどきこえける給ふかくちおしかりぬ
ひまぬるにはきわすてけうくのうへり
さうしおもひ出ちすくまちらこまそふでのまわ
まりんて思ひめぐらし給へふさ海はくよなくめで
すし返給ひありきなとけちえんなきひいゝ筆とわ（白赤御八筆勢アザヤカニミヘエルモノヽ）
あをしもういまゐへふさ海さへしらんひとは（枚）
かなめてぬべき浅はわはまも無部へ宮わすれ給はむ
きこ経れはおとなきてはなおもしまわ御志とき
ぬいわうへさうを給て庭のまとわいまきはむらこの
宮もいときよげにましますへ（六条院ノ扇下ヲ返給テイ）りはまよくおゆかんのかね

カヽル草紙原ノ和
給ニ玉来シテモ色
テト双ヽ

給ほどうちふもへくのかきてみなはうちあかしこ
まわてうこみりうはけしうちゐまへふもいとゞ
きこすゝ也はまくふこりわ給もくはし寄まで思ふ
たまへらはうこ給みのどくおふおわよくわさを
たまへはとよ給ひびやくたまうね御さうし
もこ弱てわこわたまへふあわなわやがて御覧
ほまはすくれてしきあぬはきをあさうふとに
いとゞふりふで見て給ふしきあわてう義なし
たまへ里うこめおとさうめきうば見ゝ給かるゝ
どもをゑわてたゞ三らざかわりもしすぐ
なまきのましくうりきがへふおとゞは覧じ

なとかきぬるまてハ思ひへたてさりつるを小
筆にけすほとしやとおもふたかはなにふかく
おもなくくたす筆のさまさりともとなん思ふ給ふ
るとたはふれ給ふかき給へるさうしともかく
したまふへきならねはとうてゝかたみに御らんす

唐帋ノヤワラカナルハアシヽ能メウシト云ヿ也スクミタルトハコハキヿ也

からのかみのいとすくみたるにさうにかき給へる
すくれてめてたしと見給ふにこまのかみのはたこまかに
なこうなつかしきかいろなとはゝなやかならて
なまめきたるにおほとかなる女手のうるはしう
こゝろとめてかき給へるたとふへきかたなしみ給

見給人ノ涙サヘ添ノ手跡アル人ノ涙ヲ流トシ 中務集 ナキ人ノ手ドメケル水グキヲ見ルニ涙ノ流ヌル哉

人の涙さへ水くきになかれそふ心ちしてあくよ

又宸ノカシヤノ 京ノ紙屋川ニテ色紙ノ一也 取アワメテ乱草メニヘルモ乃アルトヽ 文字ノ真草行カ 真ハ東帯シテ人ノ立タルテイ 行ハ行テイ 草ハハシルテイトヽ

あるましきにまたこゝのかんやのしきしのいろあひ
はなやかなるにみたれたるさうのうたをふてにまかせて
みたれかき給へるみところかきりなし

シドロモドロ ヨシトテモ ヨキ名モタヽシヤルカヤノ イサミタレナンシドロモドロニ

しとろもとろにあいきやうつきみまほしけれはさらにのこりともに
めもみやりたまはす左衛門督はことことしうかし
こけなるすちをのみこのみてかきたれとふてのおきて
すまぬ心ちしていたはりくはへたるけしきなり

紫ヤ朧ノ手跡ヲハ 蛍ノ前ヘ添出シタメニ ハヌトヽ

うたなともことさらめきてえりかきたり女の御はまほ
にもとり出給はす斎院のなとはましてとうて給は
さりけりあしてのさうしともそこゝろ〳〵に
はかなうをかしき宰相中将のは水のいきほひゆた

スミタルハ筆ノアカノヌケタルヲ云ナリ

ゆたかにかきなしそゝけたるあしのおひざまなど
難波のうらにかよひてこなたかなたいきまじりて　水ノヤヨヒタルテイ
いたうすみたる所あり又いといまめかしうひき
かへて文字やう石などのたゝずまひこのみ　石モタノ手ホ蛍ノ兄ルメ
かきたまへるひらもあめりめもおよばずこれはいとまいり　枚ノ　まいり入
ぬべきものかなとけうじ給ふなにごともものこのみし　ヘタタ且ハ隙ヘタルニテ名ト也　双兵ノ
えんがりおはするみこにていといみじうめで
給ふけふは又手の事どものたまひくらして
さまざまのつぎ紙の本どもえりいださせ給へる　サヘ有シ手ドノツギカミノ善本
ついでに御子の侍従して宮にさぶらふ本ども　蛍ノ兄子　蛍宮二
とりにつかはすさがのみかどの古万葉集を　古

サガノミカド）古万葉集ト云古字ハメバイニシヘト云ム、フルキト云ニハアラズ万葉集全部ニアラズ四巻斗手本ノタメニ撰シテ手本トシ平城ヲナラノ帝ト申シ又聖武ヲモ申ナリ万葉集ハ聖武ノ御宇ヨリモ粗センジ作シテ平城大同元年ニ撰之シセシ者ハ惟ニ不見シ俊成ハアヤニウテ大仏作セ給ヘ奈良ノ帝ノセンシタニヘルト云リ其後定家ヲ助ヘテセン者惟ニ不知俊成白ハアヤニリト云リ

古今和歌集　延喜帝御門ノ御即位ヨリ八年ノ後センシメ玉ヘバ御震筆モニヶニヤ相東シ延喜二十スラヘテエル蛍ノ父ハ門トムヘ
カラノ浅花田ノ紙　コキモンノキヒヤウシ紫ノウスキ表シ唐アヤナドシカミノ浅花田トロシ奈シ
同キ玉軸ダニカラノミシヒモ玉ノ名モ表紙ト同ジ色ノ組ノ乙組タルトナリ
巻ゴトニ一ニ昔ノ能筆ハ皆挌ニ行ヲカヘテ書ケルト又王義之ニモ種々ノ体筆ニアルトシ行成ハ十二色ニテカヘ給トシ
オホトナブラ一ニ文ナドクルニハ切灯臺トシ

えらびかゝせ給へる四巻延喜のみかどの古今和歌
集をからのあさはなだの紙をつぎておなじ色の
こきもんのきのへうしおなじき玉の軸
だんのからくみのひもなどなまめかしうてまき
ごとに御手のすぢをかへつゝいみじうかきつく
させ給へるおほとなぶらみじかくまいりて御覧
ずるにつきせぬものかなこのころの人はたゞかた
そばをけしきばむにこそありけれなどめで給ふ　源詞
やがてこれはとゞめたてまつり給ふ女子などを　蛍詞　女子ヽ
もてはべらましにだにをさをさ見はやすまじき
にはつたふまじきをましてくちぬべきを
などきこえてたてまつり給ふ侍従に

皆ノ人ハ万水ニ一露云前ニハ丸ニ十八首代ノヲスクレタルト云ル又ニハ皆ノ人ハカタノハト云リ只源氏ネドロキ給ヘル計ヲ斗ト云テ時ニウツリオドロクヽ
ヤガテ見之ハ源ノ方ニ石ニ色トゞメ給トヽ
女子ニ一蛍ノ兄ルモノハ女子ニ侍ルトヽ蛍タト（女子ヲ持タリ氏不見届オ見ルニ侍ニシキテニシテ娘不持アラシヌスタルベキヲト
テ明石ノ姫ヘトナリ給トナリ
侍従蛍ノ子ヽ源ヨリ右ノ名報ニ宝ヲ給ヒ

（此本ニ 世中ノ人ノ心ヲノタメニアワメ絵手ヤウユヤシカルトし）

かゝる事などの心とわきまへがましきちん此あたりよ
いまではゐなしもちま留らんてまぢ給ふまゝに心はへ
まうどんなのさゝめあし給ひて筆中をうしく心
おかしうるみなりしも此人は小もさはへ義物此
おりそうしひてさら給てう世給はたこゆは
なちくさまやふなはまのぎ給ひわさと人のかと志れ
わのせたまひてさうしまき物なんかしきあはれ
とくれよめばらかな御はたうる物此人の法門まで
御わがさけなる中にも此かどもあんゆりしと
んうこふ給わる人よふ御用うわかる法えども心をき
のへはせ給中よう此ほまの日記はすゑよまつてへ

（源ノスニテ手習絵 見ル絵合ノ巻ニテ二巻取出シタニヒテ 御巻ハ末ニ二取出サントノタメニヒテ残シキ給ヒ只今モ一ダヒメ初ニト思召セ也トし 絵合ノ巻ニテノタメニヘル一文ニテ之出スト可心得し）

（明ノ人内ノ一ヲ内ノハ 雲ノ一ヲ思召トし）

志らさんとおかせとも御はらし世捨もおかし志わ
なん此うにおかしうへしてまさとう出給さはうちの
おとゞたちの御心は義を人のうへまて申給ふも
いみしうん待なくさうくしとおはゆ謝く此は
有様はりわれとしのひて給ふきこゆまはくしけ
なわはまく心う他志めわ給ん御ほどいかへし哉
はふかるかきさかなるよりけひとの法気色そ〳〵たまへ
やうよめふうのなまたこ給よりくすみよらむも
ひとわれそれあり人氏さん法あわしきざらんあり
あひぶなまうかなどひと志まはおかしあかゝまで
一うるりはえなもえおかきに御りは帰くまそう

（人ノ子ニゴロ 源モ行ヲ 源御ドキハユルサデ 今又ヨ御ノ付方メハ ト思召内ノハムし）

（一方ニ 内ノ人心此十 ガラ九ニ仕置タルヲ サバアヘテ源タイトガ トサモネ思トし）

アリヌヤト忠ミガテラ
アヒミテハメサシニテキ
ニテゾコヒシキ

右ワトハ中務宮
二人臣ニ示ス馬会先祖
右大臣ハ自近衛ノ
父ノ一カ其比大臣
カト何ニ云リ

たゝかんたまへる御きしきを宰相の君はきゝて
なまめんどおもしはかりまうしはさるをうしなる
思へばまなくもそなしきはめてさしかふかの
ほまのうるはしはりふべくもかゞえはうるはしう
みはふまゆくさおはかりまゐどあさみどわきてうえ
うちし御めむとせよ納言ふのかわてみえむの
はんふかう殿しかしいはあやしくうむふ
はまうかせうおかしかやみそみれさせける思
たえよたうぞ右乃おとゝ中務乃宮なとせらしき
げんいをおめふをいばきも思ひさだめられたると
の給へど猶もせむおぼうしこまわりうるさなまて

源我ワカキ寸父キリ
テイ一ハ戒サハ可随
氏不思ワル事好色
ノ一ニ我今ワニセ
カメキトし

シリビ 俗云ニシリ
ノヨハキト云ふし

さふらひおやうのうゐかしこ奏はまつへふ
ぶまえてさうふべくもおぼえぶわしうばうとまをき
まうけまゐせと思ひはいはぶゆはのの侍を一へうう
なすがまためしまはあわけまゐ侍くとものはまば
思ふ耐まやせよ人もをしまかなゝらんとすくきの
ひくうきそな我くくしきゝとりあはれくて
なひくいせまう併ふ人ワろまま事うやいふへしう
思ひのなまゐど心みしもうかりはははあゝ物うるすさき
は我しきんつうふふいせけなくよわ宮のうち
よわおひ出て我心にまうきはあきくいはくりせ
ことのあやまりもわうばうはくくきこうしまゐや

源氏位ホセキ方ニテサヘ好色ノ名立シニニシテタハ下位トサリ

をりんと呪はうしうなる我はまくくさゝやきをとげをと
おひてよふりしぬれめしてきくくる身あさく物と
なまみ乃雅うちとけんのまてなるかるまひなど思
をしなこと葉をのはうるをごわぬまでは思ひきこえばむ
尚まくきりひなれとき母のもとまでなんうしさまよ
人目をさだめしためしわかるはさまつなおもとに
おこと葉をつきて人の名をもそえばりしも物をおふ
なんつ丹はほたゞしかうあわれはわあやまわはるゝ
うん人はわすこと葉よ乃婦はむきみはりんさとかうさ妻

モシハーー女気ニ不入ドモ其母父ノ心ニ思ナラシ又其心ヤラニモトし

かくはわともおぼ思ひかへさんをなまひてりしは
おやのへよゆばかりしそおやまくて世中にあてほよ

あわとも人がうまこの後の事しをなどあるらむ人をれば
その道をりたうどとりよきてもみゆまゝへ我ただめ人乃
ためつ丹ありよりふべきよんずふかうはるべきなどど
のどやかふつましくなかなれわいかうあ心はのひ我
乃さなりへ入かふかやうなある清いさめありはまて
さはまってもかのずめれしんを思ひあかるはい若ふ
人庵わなうはおかしたまふ好もはまよわことあり
おとの思ひ歌き絡清気さよりばりしきうさき

芦根ハフウキハエコソワレナケレ下ハエナラズ思心ヲ

あとおかしめどうゝいはまなく和歌どうまて
なかめはくし語清文は思ひはまさ語おわしく哀ふ

古今ノ偽ト思ヤセラ今更ニタガマコトヲカ我ハタノマン
メノ心ニ偽有ドモ我ハ今テタガ誠ヲカタノマン
タヘト思入タルし

人ふの義はまよきこえ語たかはことをりとおもひ

源ノ雲ヲタヘトス入
給ニ我シウ子キ入引
タガヘ給ヲ今更心ヨ
ハソコナタヨリ云ヨ
ラビスト雲井ヘ内ヘ
ノ御給シ

なげかしよなきハいふかひなき人こそおなかゝらり人乃きこゆ
なをもうちつぶやき夜とみ給ふ中にも中務の
君なん大殿にも宰相殿にも侍ひたまりわてさりや中
おほしかりしたなると人のいひこえてかゝりしかば
かへし給むまのさかなし思ひて内侍の事をとこそ
きゝしゝ情なき人は心のかはりて侍れ乃
くちをしき心ちしにきこゆるまきとそおきたがへ
給ふなる心よはくなびきてもひとつへあらへ
まし事ども深をうけての給へなど御こいとりは
うしろめたく深もいかなく深さがなくまいりした
あくてうむき給へはらうたげさのさまなしめに

女方ヨリ云ヲ進ミ
出ルト云也
夕ハ中ノ方ヘ帰トシ
縁ノカギリ成ヲコナ
タハ忘ヌトシ夕ハ
深ニ泥ム力ヲ見セトシ

きましなひやすくいひてしまひとどまりしなど
おかしみまでて立給めるおおも宰相かてりしおうう
なかめ給おやしくけをきまでもすゝ見出ける深
りのふおほしつゝんなどをちの思ひの御かへる
かとの雲ゐのこゝちはかなくしたまはんかたを
はまなきはうき世のほかなかりをもまね
人やひとよりとなりとおもはぬこともなきぬ
はまなさよと思ひはしけたまふにうちはせぬ
おもはとてやまれかたてもことやせ小
なびくんなるらんとはるおなしたうはなのれは
うき事つゝみ井のまへふらう

トゾ云ヤ侍
タルト例ノ縁ノ
ノ手ならし